

営農情報

第117号 平成24年4月11日発行

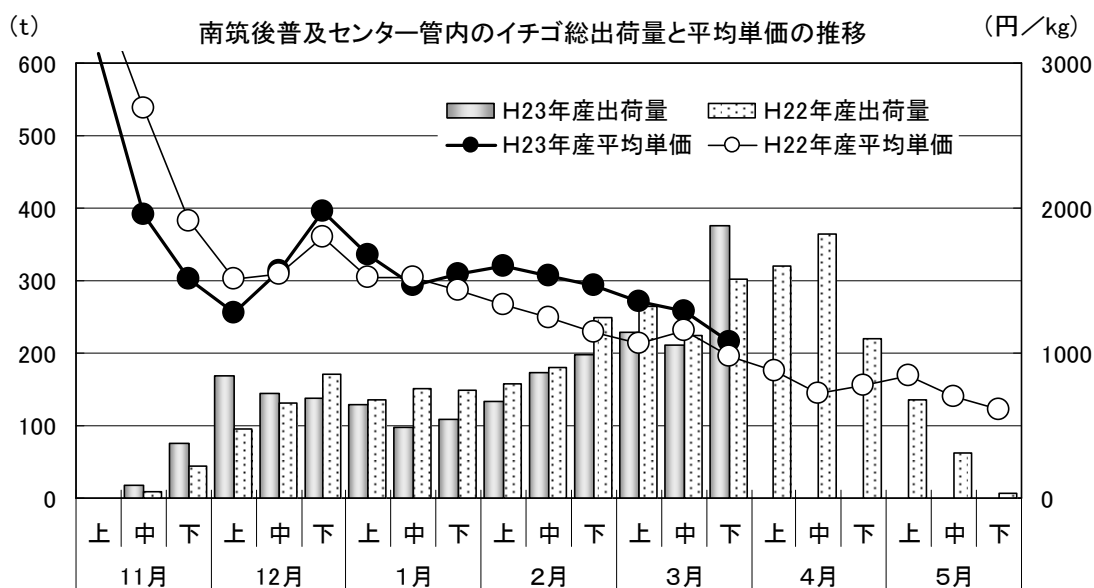
(イチゴ)

J A 福岡大城
南筑後普及指導センター

最近は日照時間が多く果実の成熟が日に日に早くなってきました。現在の生育状況は、3番果房が早期作型で1～5果収穫、普通ポットで着果～収穫始めて、4番果房が早期作型で出蕾～開花、普通ポットで一部出蕾となっています。

今後は気温が高く、日射しが強くなるため、過熟果・傷み果の発生が心配されます。妻面の開放や遮光資材等の活用による降温対策を行って下さい。また、病害虫では、ハダニとスリップスの発生が見られます。これからはうどんこ病の発生にも注意が必要です。

親株は心葉が動き出しており、4月中旬以降ランナーも発生してきます。「炭そ病」の病原菌も活動し始めますので、定期的な防除を行って下さい。



本ほ管理

1 かん水管理

- ◇ かん水は少量多回数かん水を励行する。温度上昇とともに蒸散量が多くなるため、かん水量を徐々に増やし水分が不足しないように注意する(目安はpFメーターで1.7～1.8)。
- ◇ 果実品質(日持ち・食味)のため収穫直後のかん水を励行し、収穫前日のかん水は控える。

2 果梗の除去と花だし・玉だし

- ◇ 収穫が終了した果梗は、キズ果防止と次果房出蕾促進、黒カビの発生防止を目的に、早めに除去する。ただし、無理にとると他の果実にキズがつくので注意する。
- ◇ 株が立ち上がり、果実が葉の下に隠れると、黄種果や軟果の原因になる。果実に光が当たるように葉よけや摘葉を行い、花だし・玉だしを行う。

3 軟果対策

温度上昇等により軟果の発生が多くなるので、以下に注意し、果実品質の維持を図る。

特に、降雨後や軟弱徒長傾向の株、成り疲れ株での発生が多くなるので注意！！

- ◇ 収穫遅れによる「過熟果」「傷み果」の発生防止のため、「収穫間隔の短縮」「着色基準の厳守」を徹底する。収穫した果実は傷まないよう、収穫箱内での積み重ねを避け、早めに低温の場所に移す。

〈温度管理の目安〉

- ◇ 晴天日はサイド・谷・妻面の換気を早朝から行い、低温で管理する。(夜温が7℃以上の場合は、夜間も開放状態とする)
- ◇ 遮光資材(寒冷紗、塗布剤)を活用し、温度上昇を抑える。遮光が強すぎると黄種果の発生が助長されるため注意する。(ビニールへの塗布は、1回目に薄めに行い、日差しが強くなった頃に追加塗布する方法が望ましい)
- ◇ 降雨時は、雨が降り込まないように注意してサイドや妻面換気を行い、湿度を下げる。

	管理温度	
昼間	午前	18~20℃
	午後	18℃以下
夜間	5℃	

4 ハダニ、スリップスの防除

- ◇ 今年度はハダニの発生が非常に多い。ハダニが発生している株は、強めの摘葉後、葉裏まで付着するよう丁寧に薬剤を散布する。多発している株は、拡大防止のため株ごと除去する。
- ◇ 3月中旬よりスリップスの発生がみられる。今後はハウス外からの飛び込みも増加すると考えられるため、定期的に薬剤防除を行う。(ミツバチを返却するまではIGR剤を中心に使用する)

5 うどんこ病の防除

- ◇ 年内からうどんこ病の発生しているハウスが散見されており、今後も発生が増える可能性がある。発病を認めた場合には、罹病葉や病果を速やかにハウス外に持ち出し、葉裏まで付着するよう丁寧に薬剤散布する。多発している株は、株ごと除去する。

6 日焼け果・果実の煮え

- ◇ 雨が続き、ハウス内の湿度が高まり、果実表面に水滴が付いたような状態の翌日に快晴で温度が急に上昇した時に発生しやすい。
- ◇ 谷換気により直射日光が当たる谷から2列目の畝やハウス中央部に発生が多い。
- ◇ 日焼け果は果実表面が白や銀色になり、果実の煮えは全体的に暗黒化する。
- ◇ 対策としては、曇雨天後の晴天に注意し、換気や遮光を行って果実温度の上昇を避ける。

専用親株の管理

健全な苗を育成するためには、親株管理が最も重要です。ランナー発生前からの薬剤防除を中心とした「炭そ病対策」と親株の順調な生育を促す栽培管理を行って下さい。

1 「炭そ病」対策（「炭そ病」はランナーが活発に発生している時期の感染・拡大が大きい。）

- ◇ 「炭そ病」予防のため、ランナー発生前から10日に1回の間隔で薬剤散布を行う（有明連協だよりの『「炭そ病」を中心とした薬剤散布例』を参考にして下さい）。
- ◇ 病原菌は古葉や果実を摘除した傷口から侵入しやすいので、降雨直前の作業はなるべく控え、摘除作業の後は必ず降雨前に、薬剤散布を行う。
- ◇ 畝面に全面マルチを行い、土と遮断する。さしポットの場合は、切りワラを敷き詰める。



畝面に切りワラを敷き詰め、
かん水施設を設置

2 その他管理

- ◇ ランナー発生前に古葉を摘除する。
- ◇ プランター等で親株を育成する場合、IB化成を4月上旬までに10粒/株（1回目）、5月上旬までに5～10粒/株（2回目）を施用する。
- ◇ ランナー発生期の4～5月に乾燥すると、生育遅れやランナー数の減少を招き、採苗時期の遅れ・採苗本数不足の原因となる。水分が不足しないようにかん水設備を準備しておく。
- ◇ 排水対策用の溝を必ず整備する。
- ◇ マルチの隙間から出た親株周辺の雑草は手作業で除草を行う。
- ◇ 棚式育苗の架台下の除草、排水対策を行う。

重点啓発事項(スローガン)

- 1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底！
- 2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳！